

第二期 第六十三号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2021. 10. 20 定有堂書店 発行

思いの手放し

奈良 敏行

失われた本をもとめて 『SF教室』

三砂 慶明

汽水のほとりから (7)

小原 修治

バイシクル、バイシクル！

萩原 俊郎

ポメラニアンの記憶

森本 龍哉

「深い学び」をめぐる Ⅹ

松田 裕史

ニューロダイヴァーシティー

芝野 浩貴

八代日記 (十九)

齊藤 仁昭

美を漁すなど(り)し人

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その六十二

内田 克彦

いまだぎ。

秦阜 梅林

働きアリでいるのは疲れてしまうから

三浦 永理

放哉さんとくだもの

あきの素生

ポケットに猛獣を

ドラマリア

…… 編集後記



思いの手放し

奈良 敏行

(定有堂 店主)

「音信不通」六十号に、「翻訳まで」というタイトルで、宮川敬之さんに寄稿していただいた。「Realizing Genjokuan」という書物の翻訳余話だ。十月一日付けで春秋社から刊行される。九月十二日に、「念校8\27」と記された校正刷りと原書を見せいただいた。カバーだけですぐに出来上がっていた。書名は『「現成公按」を現成する』だ。

原著者は奥村正博師で二十代からアメリカで道元禪の指導に携わっている。行としては座禪修行だが、予備知識のない欧米人や様々の民族の人びとを、相手にしなければならぬ。そのため宗祖道元禪師の「現成公按」をテキストとして用意されたわけだ。もちろん英文でだ。道元の主著は『正法眼蔵』だが、「現成公按」はその第一巻目として一般人に向けて書かれたと耳にしたことがある。わたしはじつはこの世界のこと何もしらない。本屋なので眼にし耳にするというだけのことだ。宮川さんとの触れ合いも定

有堂によくお見えになる禅僧の方として畏敬の念を抱いているだけだ。いろんなことを質問して選書のじやまだどうるさがられているかも知れない。「何を学ばいいですか？」と問うわたしに、いつも「コナトウス」とくり返し応じられる。この一語を求めていろんな本をあさっている。

奥村師はこの本のなかで、お伝えしたいことは「花が咲いている実際の瞬間においては、花はただ花として咲いている」と語られる。これが結論のようだ。そしてこの結論を共有するためには、「思いの放手」が必要だと付け加える。知ることと体得することは違う。だから、くり返したくさんの比喻やエピソードを交えて、懇切丁寧に説き続ける。わたしには仏教知識がないので、道元禅師・奥村師・宮川さんの言葉が一体となって説話のように聞こえてくる。文体の語り口がとても読者に寄り添っていて、心地よく優しく響いてくる。それは表層としては宮川さんの文章の力だが、その深層も重なり合って分別することができない。書物の肉声というのだろうか。魅力的な書物だ。

わたしは生活者なので、常々普遍的な真実よりも、自分一個の「このもの性」を重視する。「笑って死ねればそれでいい」という自分中心主義だ。真実よりも実感を優先する。真実は普遍の側にあり、実感は「このもの性」としてあらわれる。

「刹那生死」という言葉があった (P.151 頁)。説明して、「現在の瞬間こそは、私たちが経験できるただ一つの生命現象です」とある (P.162)。わたしが日頃考えているのはつづめていえば、極大と極小、そして過去と未来のこと。どちらの果てへも認識は届かないし、かりに届いたとしてもそこには何も存在しない。若い頃「おれたちに明日はなご」(「Bonnie and Clyde」)と叫んでいた。ふと気づけば、ここの一月やはり「おれたちに明日はない」、と我が家で叫んでいる。二十歳の頃にも同じことをいつていたと家人に指摘されて気がついた。二十歳の時は「今ここ」という実存の表示だった。こわいものがなかった。いまは、「今、ここ」を見失って、余命わずかのなげきしかない。こわいことだらけだ。

この校正刷りを読んでいたら、ほんとうにあるのは「今、ここ」だけと説かれている。過去も未来も他人ごとで、私ごととは「刹那」のみと理解する。耳慣れないが「生命実物」として思い至れと教えられていると知った。

「思いを放手す」、何を放手すのだろうか。別の本を読んでいたら「アデイクシオン」と説明する人もいた。きちんと理解できないが、わたしはオブセッションという言葉から逃れられない。固定観念と言い換える人もいる。

宮川さんが永平寺で修行されていた頃、久しぶりの帰

省の折、隣にあった喫茶店でお話する機会があった。修行のあれこれをうかがった。「応量器」というのだろうか、食事の作法に関して話が及んだ。お椀の取り方とかだ。所作を実演してください。」「なぜそうするのですか？」と問うと、「美しいでしょう」と応えられた。なぜだったかは判然としないが、その瞬間手を合わせる自分がいた。宮川さんは「やめてくださいよ」と笑っていた。この校正刷りに読みふけっている刹那、その光景が突然甦ってきた。地続きの何かを感じた。

十月には、この翻訳書が定有堂そして全国の書店に並ぶ。コロナ後のそれから生きる支えが、きつとここにあると信じている。

2021. 09. 14

(参考)

奥村正博 (著) 宮川敬之 (翻訳) 『「現成公按」を現成する』

春秋社 2021

安谷白雲 『正法眼蔵参究現成公案 新装版』 春秋社 1999

『Realizing Genjokoan: The Key to Dogen's Shobogenzo
by Shohaku Okumura (2010-07-06)』 Wisdom Publications
2010

太極拳教室 (会場 定有堂二階 葉香クラブ (荷葉))

毎週 水曜 十九時半から ・ 土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

失われた本をもとめて

『SF教室』筒井康隆編 ポプラ・ブックス

三砂 慶明

(「読書室」主宰)

古本屋で本を探していると、突然、頭の中のスイッチを激しく押されることがあります。ガラスケースの中で、お行儀よく飾られている本は、ご挨拶程度に値札を確認するだけです、本棚に希少本がささっているのを見つけると、途端に鼓動が早くなります。まずい。とにかく早く手をのばせ。しかしながら、今日、財布にはいくら入ってたんだっけ。このお店って、クレジットカード使えたっけ。いきなり心が千々に乱れはじめます。どきどきしながら本棚に手をのばし、裏表紙を開いて値札を確認すると、想定よりも高ければ、一度、考え直すために棚に戻しますが、いちばんややこしいのは、買うつもりがなかった本が相場どおりの値付けをされているときです。

俗に古本は、一期一会といわれています。このタイミン

グを逃すと次に出会えるのは、十年後かもしれない。だから多少高くても買っておくべきなのはわかっているのですが、しかしそう簡単に思い切れない優柔不断さが、私の財布の残念なところなんです。しかしながら、この日見つけた『SF教室』は、値札をみずに買いました。想定より少し高めの金額でしたが、予定を変更して、早速帰宅すると、その勢いでよみはじめました。

『SF教室』は、昭和46年に発行された、当時、押しもおされもせぬSF作家、筒井康隆を筆頭に、豊田有恒、翻訳家の伊藤典夫の三銃士が、高校生、中学生、小学生といった少年たちのために執筆したブックガイドです。とにかく、文章が熱くて、読んでいられるだけでもその熱が身体に伝わってきます。

「SFを読みはじめて、まだ三―四さつめ。SF全体のことが知りたい―そんなきみなら、これを読みたまえ。この本は、きみのための本だ。

でも中には、まだ一さつもSFを読んでいないくせに、この本を買った人もいるだろう。

入門書と首つびきで、一から始めるのが大好きだ―そんなきみなら、やはりこれを読みたまえ。これはきみのための本でもある。

みんなが♀、♀とさわいでいる。♀って、なんだろう。SFのどこがおもしろいのだろうーそんなきみだって、やっぱりこれを読みたまえ。きみにぴったりの本なのだ。SFをたくさん読んで、SFというものが、だいたいわかったような気がする。でも、ほんとにほくの考えが正しいのだろうか。そしてまた、もっとすばらしい♀を、見のがしていないだろうかーよろしい、そんなにきみが不安なら、この本を読みなさい。」

の読者が育たなければ、SFの未来が開けない、という作家たちの覚悟です。この本で、SFと出会った読者は幸運です。この本は私だけの本である。読み終わってそう実感できる本は、それほど多くはありません。

数多くのブックガイドのお世話になってきましたが、これほど熱く語られるブックガイドにお目にかかったことはありませんでした。この本が素晴らしいのは、ただ情熱的だけでなくあります。SFというジャンルの誕生にかかわった作家たちが、知りうるかぎりの知識と技術を総動員して、SFの魅力をこれでもかといわんばかりに語り尽くしています。SFの定義にはじまり、その歴史をさかのぼりながら、名作を紹介し、小説だけでなく、漫画や映画についても視野をのびし、SFにでてくる単語や技術、世界観を細心の注意を払って解説しています。最後には年表が掲載されていてとても親切です。この本を読んだ少年たちが、作家と交流できるように、親切に手紙の書き方から住所まで掲載されています。この本の背景にあるのは、♀

汽水のほとりから (7)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

最近、地元ケーブルテレビ局TCC(鳥取中央有線放送)の番組で、とっとり琴浦熱中小学校の授業を初めて見た。熱中小学校とは六年前に始まった全国的なプロジェクトで、「もっいちど7歳の目で世界を…」を合言葉に、海外1校を含む16校がこれまでに開設されている。総生徒数は現在千百名を超え、10代から80代までが在籍しており、多様な年齢層との交流も可能である。二百五十名以上いる講師陣は企業経営者や研究者など多彩な顔ぶれで、しかも基本的にボランティアである。廃校の利用をはじめとして地方自治体が積極的に関わっているのも特徴的で、学びの目標の一つに地域課題に挑戦する人材育成を掲げている。誘致した琴浦町の取り組みはもっと知られてよいと思う。私が見たのは大村はま記念国語教育の会で事務局長を務める荻谷夏子氏による講義形式の授業だった。彼女は自分の中学校時代の恩師で伝説の国語教師として有名な大村は

まの思い出を語りながら、国語教育の意義について熱く語っていた。国語とは本来、何を学ぶべき教科なのか。彼女も大村に教わるまでは国語なぞ勉強しなくてよいと甘く見ていたそうである。それが大村との出会いにより、百八十度変わった。言葉を選び取ることの難しさ、言葉と付き合うことの厳しさを教わったのだという。彼女曰く、大村に教わった国語の学習とは、クライミングのように、次に繰り出す手や足をどの位置にどう置くのかを判断し、慎重に高い壁をよじ登るといったイメージだそうである。

大村はまは「言葉の力とは、人そのもの」と教えていたという。にわか仕込みの外づけの言葉は人に伝わらない。それは消費される言葉ではない。逆に、しっかりと自分をつかみ取り、自ら懐に納めた言葉は、人に伝わるどころか、自分を終生支えてくれる力をもつ。国語は言葉を学ぶ教科だが、知識を増やす作業などは従で、言葉を自分のものにしていく訓練の方が主だというのである。97歳の大村は小学生に向けた講演の中で自らの小学校時代の思い出を生き生きと語り、「国語のお勉強で本当に大事なことは、うまく書けるとか話せるとかではなく、自分の体験をよく覚えていて忘れないでいることですよ」と述べたそうだ。豊かな言語生活を営むには豊かな心こそ必要なのである。

その大村が世を去って早や十六年、我が国の国語教育

は大丈夫だろうか。まだ知らない人も多いと思うので改めて言及するが、来年度から高校の学習指導要領が改訂され、国語の科目構成が大幅に変更される。具体的には、現行の「国語総合」が「現代の国語」「言語文化」に、「現代文」が「論理国語」「文学国語」にそれぞれ二分される。特に後者の分け方については従来から問題が指摘されてきた。単位数には限りがあるので、両方の科目を履修することは難しく、「高校国語から文学が消える」とまで騒がれた。

文科省は何を考えているのか。「論理国語」誕生の背景には、PISA(国際学習到達度調査)の読解力(Reading literacy)分野で日本が大きく順位を下げたことが関係すると言われている。また最近では、AI(人工知能)研究者の新井紀子が開発した「RST(Reading Skill Test)」によって教科書レベルの日本語さえ十分読めない児童生徒が多く存在するという結果が示されたこともあるようだ(松岡亮二編『教育の新常識』中公新書ブクレ所収 伊藤氏貴「論理国語という問題…今何が問われているのか」)。

だが、大村はまの言葉を思い返そう。彼女が国語教育で目指したのは、技術的なことではなく、言葉との付き合いを通して心を育てることだった。確かに、言葉は論理性を備え、それは文章の読解に役立つ。しかし、人間の知性はAIのように論理的思考だけで成り立っておらず、身体を

持つが故に無意識的な情動とつながっている。そのため、自己の心を発露させれば、睡眠中には荒唐無稽な夢を見、言葉の使用においても一見無関係なもの同士をつなげるメタファー(隠喩)などの表現方法を駆使することになる。説明文ならともかく、文学作品、殊に詩歌のような藝術を読み解くには情動を抑制しない本物の知性が必要なのだ。実は文科省は、学習指導要領の改訂に合わせるように、来年度からGIGAスクール構想という事業をスタートさせる。生徒に一人一台学習用端末を用意し、全国一律の高速大容量通信ネットワークも整備するというものだ。が、これはAI的な知性に偏る人間を大量に生み出すことになりはしまいか。荻谷夏子も先の講義の中でこの新事業について触れ、それが必ずしも児童生徒の言語生活を豊かにするとは思わないとした上で、「便利にはなるでしょう、ツールにはなるでしょう。でも、言葉っていうものどう付き合うかということを教えられるのは、機械ではなく、生身の人なんじゃないかな」とコメントしていた。現役の国語教師として、この彼女の言葉を肝に銘じたいと思う。

バイシクル、バイシクル!

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

仕事を辞めてからは、クイーンズの歌ではないが、「バイシクル、バイシクル!」の日々を過ごしている。スーパーへの買い出しも、市民図書館への足も、倉吉市内ならたいてい自転車で用が足りる。

一応、車があることはあるのだが、なんと言っても、ガソリン代がもつたない。以前勤めていた会社で良かったことといえば、ガソリンが使い放題だったことに尽きる(まあ、それぐらいか)。そこで、ライダーの仕事で遠出するか、よほどの急用、悪天候でもない限り、車は使わず、自転車か徒歩で済まそうと固く心に誓った(というほど大袈裟なものではないが)。

相棒となる自転車は、もうかれこれ二十年近く乗り続けている歴戦の兵(つわもの)である。

大阪に転勤となり、通勤の足にと、当初はボロの中古自

転車を買ったが(だから、なんの愛着もない)、乗り始めて数か月もしないうちに、船場センタービル地下の定食屋で腹ごしらえしている間に、ガードレールにチェーンでかかり留めていたはずの自転車がチェーンごと、きれいさっぱり消えていた。

「さすがは大阪!」。先に着任していた同僚から「大阪では遅かれ早かれ、自転車は一回は盗まれる」とは聞いていたが、いやはやゝ腹が立つより、その鮮やかな手口に舌を巻いてしまった。どうやって白昼堂々、繁華街の真ん中で太いチェーンを切断したんだろ。

まあ、また盗まれてもいい中古のオンボロ自転車でも買うか…と大阪駅前の梅田界わいをウロウロしていたら、丸ビル(かつて梅田のシンボルの存在だった、あのとつぺんの電光掲示板に時報や天気予報がグルグル流れるビル)周辺が騒がしい。何だろうと近づくと「L.L.ビーン」が閉店セール中だった。

とはいえ、家族を倉吉に残し、船場センタービル地下の500円定食か、松屋の牛丼290円でしのぐ単身赴任生活。ふだんなら見向きもしない閉店セールだが、この日はクンクン何だか「匂い」がして、引き込まれるように店内に入った。

「お客様、もう商品はほとんど売り切れまして……」と店員。だが、ガランとした店内の片隅に一台、自転車があるではないか。「SCHWINN」の文字。「あれ、いくらですか?」「明日には店を閉じますので、もう70%引きの1万8千円でいいです」。運がいいことに手元には1万円札が二枚。

実は「SCHWINN(シュウイン)」、19世紀末にシカゴで創業した、イギリスの「RALEIGH(ラレー)」と並ぶ世界有数の老舗自転車ブランド。街の自転車屋でも滅多にお目にかかれない代物なのだ。

こうしてわが相棒となった自転車、よく串カツを食べに行く新世界で盗まれないかと心配したが、「いい自転車は逆に盗まれにくいのだ」と分かってきた。中古だと「つい出来心で盗んじやう」のである(ホンマかいな)。

◇ ◇ ◇
このアメリカ生まれの相棒は、ものすごく頑丈であることも次第に分かってきた。この二十二年間、前輪のタイヤこそ摩耗して交換したが、その他は壊れる心配がない。

なので大阪に続いて、東京通勤にも同行した。寝苦しい夜は涼を求めて寝静まった浅草の仲見世通りを走り、春は千鳥ヶ淵に花見、秋の休日は皇居一周、秘密保護法反対のデモに囲まれた国会議事堂にも出かけた。

よく考えれば日本の二大都市、東京・大阪を両方とも走り回った自転車は、そうなのではないか。今は倉吉でのんびり第二の人生を楽しんでいる。

持ち主の方は：と言えば、寄る年波に負けまいと、あの自転車の旅番組で「女性の敵」から一躍「中高年のアイドル」になった某俳優が愛用のカスク(ドイツの戦車兵みたいな革製防護ヘルメット)を入手し、気合を入れているのだが、かつて大都会を快走していた勢いはない。それどころか時にあえぎ、息が切れ、「この坂、苦しい。もう、いやだ」と呪いの言葉を吐きながら、それでも好き好んで坂のあるルートばかり選んでしまうのは、登り切った先に「至福の時」が待っているからである。

長くゆるやかな下り坂を、風を切りながらなるべくゆっくり、楽しみながら下っていく。体中の汗がすつと引いていく。この瞬間を味わうために、ずつと、ずつと頑張ってきたのだ。「人生、下り坂、最高!」あの俳優が絶叫する言葉に嘘はない。

ポメラニアンの記憶

森本 龍哉

(鳥取大学地域学部4回生)

電車で向かいの席に座る人が新聞を読んでいて、しかしその新聞の日付がその日から2日後の日付に見えた。だから思わず私は目を凝らしたのだが、それは1週間前の日付だった。その程度のことなのに、そのときのことをはつきりと覚えているのはどうしてだろうと思うことがある。夏の住宅地に佇む猫が車窓越しにこちらを振り仰いだこと、スズメが歩いていた秋の昼下がりの自転車のこと、年の暮れにアイスクリーム屋の駐車場でアイスクリームをほおばり笑いあう私の知らないふたりのこと。通りすぎていったそうした些細な出来事が、いまでも私のそばをうろついている。そのときは、いま見たものが私のそばにとどまりつづけるだろうと思わないことがほとんどで、だからその理由はよくわからない。

一方で、いま通りすぎていった出来事は、きつとこれから私のそばに、少なくともしばらくのあいだはとどまりつ

づけることになるだろうな、と予感できる場合がある。実際、いまから1年前の秋のそれは、私のそばでとぐるを巻いていることを折にふれて知る。

その夕方、私は袋川沿いの遊歩道にいて、そこにある木製ベンチに座っていた。目的の時間まで少し余裕があり、だから目的もなく袋川に背を向けて座っていた。この時間帯だからかどうかはわからないが、ほとんどひっきりなしに犬とその飼い主と思しき人たちが私の目の前を通りすぎていた。そのときの私は何か読みさしの本を手にしていたような気もするが、その本のことについては思いたすことができない。犬たちは私に一瞥すらくれずに平然と歩いていき、なぜか私は一瞥くらいくれてほしいなど、その後ろ姿を見送っていた。

だから、そのポメラニアンの目の前で立ち止まり、私と同じように袋川に背を向けて座ったとき、私はマスクの下で口角を上げることになった。その飼い主と思しき人も立ち止まるポメラニアンの選択を尊重して立ち止まり、ポメラニアンは私のほうを向く。私はその小さな頭にそつと右手を置き、額のあたりを親指で少しなでたあと、こういう場合に多くの人がよくそうするように、その犬の名前を訊いた。飼い主が教えてくれたその名前を聞いた私は、その名前を確認するように口に出してつぶやき、控えめ

に笑みをこぼす。多くの犬たちが通りすぎていくなかで、たった1匹立ち止まった犬。それだけのこと。しかし、そのポメラニアンの名前が気にすることなく通りすぎてしまうような名前ではなく、私にとって特別な意味を持つていたからこそ、私はその名前をくりかえし、笑いさえた。

その名前から思いだす人がいて、その名前から思いだしたその人との記憶を思いだすことでさらに思いだす人たちがいた。でも、とりわけその人がいまだどこで何をしているのか、私にはわからない。最後に会ったのは、まだ日常的にマスクを装着する必要のなかった春が近づくころで、だから私はマスクをしているその人のことをうまく思い浮かべることができない。それでも、いまこの瞬間にもその人は、消毒をプシュツツとしているかもしれないし、抜かりなく手洗いがいをしているかもしれない。かもしれない、というの、そうであってほしい、という願いだろうか。生きているかもしれないと思うとき、生きていればいいとも思っていて、もっと言えば、元気にしていればいいと願っている。

その人と同じ名前のポメラニアンは、私の目の前からベンの横に移動し、飼い主からおやつをもらっていたが、やがて多くの犬たちと同じように再び歩きはじめた。私はその後ろ姿を見送ろうとしていたが、背後の袋川がにわか

に音をたてた。ポメラニアンとその飼い主は音のしたほうを振り向き、私もそちらに目をやった。川のなかからあらわれたその音の正体は、しかし次の瞬間にはもう川のなかに戻っていた。できすぎた現実には私は現実感を失いかけるが、たまにはこういうことがあってもいい。

跳ねたそのコイがどこに向かうのか私にはわからないが、それでも日付が狂った新聞や電車を振り仰ぐ猫、自転車のスズメ、年の暮れのアイスクリームなどと同じように、私のそばでそれは跳ねたり跳ねなかったりしながら、いまの私に靴をはかせているし、その靴音を響かせてさえている。だから私は、やがてそうなるいまをすり減らすようなことはしたくないと、いつも思うのだ。

「深い学び」をめぐる IX

松田 裕史

(高校教員)

二年ぶりに苗場でフジロックフェスティバルが開催された。Green Stage, White Stage, Red Marquee, Day Dreaming など九つのステージで様々なジャンルのアーティストが演奏する。Green Stage が格付けとしては最上位らしく、メジャーなアーティストが名を連ねている。これまで参加したことはないし、オンラインで見たこともない。ある研究者が、全国規模で行われる研究大会は音楽フェスのようなものだと言っていた。たしかに構造が似ていないでもない。Green Stage のようなメインの発表があり、その後、同時にいくつかの会場で行われる分科会がある。研究大会などには聴衆としてだけでなくできれば発表者としても参加したい。音楽フェスのように日頃の実践を発表しあう機会は大きな刺激になる。年に一回ぐらいは全国規模の大会で発表できればなと思っているが、今夏は「英語授業研究学会 第三二回全国大会」の分科会で発表する機

会をいただいた。昨年に発表しようと考えていたがコロナで中止になり一年待ってやっと機会が回ってきた。オンライン開催だったので県外に行く必要もなかった。オンラインであるので全国各地の教員が参加しやすいはずだが、二日間の発表者の顔ぶれを見ると関東と関西にかなり偏っている(特に東京と大阪)。鳥取以西の発表者は愛媛県の先生のみ。僕の分科会の発表者は他に二人いらっしやっつて、お茶の水女子大附属高等学校と東京都立多摩科学技術高等学校の先生だった。

この大会は小学校から大学までの教員が参加し、発表者の中にはすでに著作があり全国的に名の知れた先生も多い。よって、発表タイトルを眺めるだけでも今の英語教育のトレンドが分かる。「小学校英語教科書を用いた教科横断型授業の提案―教科書分析結果を踏まえて―」「新しい3つの評価の観点を取り込んだ中学5ラウンド制授業の実践報告」「コロナ禍における教員養成課程初年次オンライン英語教育の取り組み―学習意欲とICTスキル向上を目指して―」「学習意欲を高める評価をどう行うか」「英語運用能力を高めるテストインゲと評価」「主體的に英語でやり取りを行う生徒の育成―リテラチャー・サークルの継続的な実践を通して―」「自律した学習者をどう育成するか―家庭学習、学習方略、自己調整―」などなど、英語教育、

というよりほぼ言語教育のトレンドと言ってもよい。2年前の研究大会の内容とはかなり異なっている。僕は「Written Interaction と Online Interaction の授業実践」というトピックで行った。Zoomなので画面の視聴者と目が合うことはないが五〇人以上の教員に視聴していただいた。発表後にZoomでの玉川大学の先生とのやり取りは有益だったし、チャット機能でコメントをいただけるのもよかった。

数ある実践発表の中でも特に注目していたのが「即興でテキスト内容を説明する、演じる(高3)」という千代田区立九段中等教育学校の先生の実践だった。特に、「演じる」というところに惹かれた。演劇的要素をどのように授業に組み込むかということも自分の中で課題だからだ。視聴した授業の中で、生徒達は即興に近い形でテキストの内容をロールプレイで演じていた。あらかじめ台本があつてそれを演じるという形ではない。単に演じるための演技ではなく、テキストをもとにした学びにつながるロールプレイだったのがよかった。それほど準備もいらず、生徒もラフな感じでやっていたのですぐにできそうに見える。しかし、表面的な部分だけ真似てもおそらく失敗する。ロールプレイを駆動させるための「問」の設定が考え抜かれていたのでそれが上手くいく秘訣だろう。

五月の終わり、豊岡にある芸術文化観光専門職大学(昨年開学)の飛田先生と知己を得ることができた。演劇的手法を導入した外国語教育の研究を行なっている先生たち。ちなみに大学の学長は劇作家・平田オリザさんである。『小学校英語への専門的アプローチ』に収められた論文「英語教育における演劇―演劇の立場からの英語劇の再考」を飛田先生に御恵授いただいた。次のような一節には同感するとともに襟を正される思いだ。「しかし、すでに述べたように、一部の英語教師は、グローバル人材育成に対して懐疑的であり、それに代わるグローバル市民の育成の必要を主張している。また、グローバル人材育成は、英語によるコミュニケーションを「手段」に限定して解釈している側面もあり、そのことからグローバル市民の育成の必要が唱えられている。」「鳥の劇場」がある鳥取においても演劇と教育が大きなシナジー効果を生む土壌があると信じている。

(参考文献)

綾部保志(編集)(2019). 『小学校英語への専門的アプローチ』春風社
平田オリザ(2012). 『わかりえあえないことから——コミュニケーション能力とは何か』講談社

ニューロダイヴァーシィティと定型発達症候群

ゝ ギフテイドとは何か？ ；

芝野 浩貴 (地球探検家)

2025年の大学入学共通テストから「情報」という教科が出題対象となることが決定された。それに先立って、来年度(2022年度)高校入学者以降の必修科目として「情報I」が設置されているが、誰が教えるのだろうか。今年には共通テスト元年であった。これまでに生徒の要する学力観、教員の要する授業観として、答えを求めめる思考から「問いを問える思考」への変換が必要だと発信してきた。例えば語学に関しては、その時代、その国のことをいかに知っているかではなく、それを使っていかにコミュニケーションできるかが問われる。英語の知識がいかに多かろうとその人がコミュニケーションしない人ならば、疑ってしまうのである。その意味において、「情報」でコミュニケーションできる人がどれくらいいるのかと疑問視する。音信不通46号で「ワクチン主義」に陥ることを心配していたが、コロナ禍で日本人は「情報」に疎いことが露呈してしまった。〈情報でコミュニケーションする〉とは、100%正しい情報

を求めたり、その情報でいいと安心することではない。一例を実効再生産数(一感染個体が直接生み出す感染個体数の平均)で説明する。

R_0 : 実効再生産数、 R_0 : 基本再生産数、 p : ワクチン接種する比率、 e : ワクチンを打って守られる安全度(e も p と同様に比率で0と1の間の実数)だとすると、 $R_{eff}(1-p)e$ R_0 が成り立つので、例えば、Covid19の R_0 を2.5、ワクチン接種率が80%で、その e 割がワクチン接種で感染しないとすると、 $R_{eff}(1-0.8 \times 0.9) \times 2.5 = 0.7$ となり、感染は収まる。接種率が60%で8割の安全度なら $R_{eff}(1-0.6 \times 0.8) \times 2.5 = 1.3$ で感染は収まらない。接種率が高いに越したことはないのでワクチン接種を勧めるのは理解できるが、安全度がどれくらい高いか不明のままに、デルタ株は R_0 が 5.8 とも言われており、機械的に計算すると p が 0.88 を超えないと R_0 が1よりは小さくならない。接種率が100%($p=1$)のことになっても、安全度 α の範囲を考えるとコロナは収まらないことになる。厳密に書くと、 R_{eff} は、ワクチンを打っても安全でない人からの実効再生産数とワクチンを打たない人からの実効再生産数の和なのだが、ワクチンパスポートなどの意味づけをして、ワクチンを打てばコロナ前の生活をしてもいいと勘違いする人が増えるので、ワクチンを打っても打たなくても同じ R_0 からの R_{eff}

となってしまうのである。ワクチンを打てば自由になれる
と思う人が増えれば増えるほど接種率100%でも収まら
ないことは数学的に証明されている。フィルターバブルと
正常性バイアスの相互作用により、自分に都合のいい事実
で分断する対象を作り続ける(定型発達症候群)が蔓延して
おり、事の大きい方に流れるのを情報だと思ってしまうて
いる。

へ情報でコミュニケーションすることの実践例は、宇宙
開発で歴然と差が出る。古い映画であるが、映画ドリーム
の原題はHidden FiguresでNASA女性数学者3名の話。
天体軌道計算でグラムシュミットの直交系やオイラー法が
出てきた。時空の天の曲がり具合を表すにはリーマン幾何
がある。4次元テンソルがある。大衆映画なのに数学的事
実も映している。

Jewish mother は英語で教育ママという意味だが、ハウ
でなくホワイを重視する。なぜという問いを大事にして、
暗記を嫌う。映画 gifted は、ナビエ・ストークスの定理
が解けたという女性数学者の娘がギフトイドで、どの学校
に行かせるべきか、情と理の狭間で悩み、教育とは何か・
学校とは何かを考えさせるものだった。これまた、ミレニ

アムの懸賞問題、ペレルマンの肖像、確率密度関数、複
素数関数積分などの専門的内容を誤魔化さずに撮影して
いて驚いたが、字幕でスタッフの名前にテレンス・オ
(フィールズ賞受賞者)を見つけた時、より内容がリアルと
なった。

2002年北京でのICMに参加して、中国の脅威を感
じ、生徒に「これからは中国の時代になる」と話していた。
それ以来映像でしか中国の様子は観てないので、コロナ禍
でなければ、上海でのICMEに参加して報告するつもり
だった。日本がオリンピックを開催するのかもしれないので
分断されている時、この文が読まれるだろう3ヶ月前の2
021年7月18日、国際数学教育会議のクロージングセ
レモニーが行われていたのを映像で観た。ロゴはICM2
002の三平方の定理の証明のロゴを囲むように八卦のマ
ークを交えていたものだった。ICMとICMEを20年か
けて繋げて国家戦略に数学使っていることを知っているの
で、日本の情報教育に苦言を呈するのである。一人一人の
生命の誕生をきちんと見つめるのが、本当の「ギフトイド」
である。

八代日記

(十九)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

九月某日

夕方に2回目のコロナウイルスワクチン接種。県が主催の大規模会場での接種で、会場のオペレーションがすばらしく、ほとんど待ち時間なく接種できた。接種直後も特に体調に変化なし。帰宅後、副反応にそなえてビールは飲まなかった。

翌朝起きてすぐの体調は悪くなかったが、昼前くらいから寒気がしてきて、やっぱりきたなというあきらめ。今日は家のことできないと思いますと妻に宣言。徐々に熱が出てきて、解熱剤を飲んだが39度7分まで熱が上がった。併せて怠さと頭痛がやってきて、寝込む。とにかく頭が痛いのがつらかった。4、5時間おきで解熱剤を飲んだがあまり下がらず。

結局その次の日まで熱があり欠勤した。夕方には急にすっきりして元気になった。これで2週間経てば俺は完全

体になれるのだろうか。罹りにくい体になっているだろうとは言え、遊びに行くぞという気にはなれず。このまま引き籠もりがちな暮らしが定着してしまうのだろうか。そんなじやダメだというのと、もう疲れてしまつてそれでもいいじやないかというのの間で揺れる。が、ダメだがんばるぞ。

九月某日

阿部和重『ブラック・チェンバー・ミュージック』読了。おもしろかった。映画だった。フィクション最高。これを読んでいる途中から、読了以後のいままで、やたらと夢を見るようになってしまった。今朝がたは北朝鮮から韓国へバスで移動(脱出?)している最中に手荷物がなくなつて、やたらとイライラしてしまつた。南に行けるならばそんなことはいいじやないかと自分に言い聞かせるという夢だった。変な夢だなと思つて二度寝したら次は前を走る車に追突する夢を見た。車のブレーキがきかない夢をよく見る。運転は苦手だ。

運転と言えば、知人が1日で600kmばかり仕事で運転したと聞いた。100キロとか200キロでガタガタ言う自分は黙ろうと誓う。

九月某日

妻が2回目のワクチン接種。私と同じで翌日から翌々日にかけて高熱。つらそうでかわいそう。家事なんてあきらめてとにかく寝るよう促す。同様に2日目の夕方に復活。打ち上げをしたいくらい二人ともつらい副反応だった。打ち上げも許さないコロナさんよ…。

九月某日

子ども用の椅子とか服とか食器とかに、くまちゃんとか、いぬちゃんとかなんだかわいいうなキヤラクターが印刷されているじゃないですか。あれっっているのかな。おとなとおんなじなので小さいサイズでよくないですか。子どもをキヤラクター視している感じでなじまない。でも自分もジョージのTシャツとか買ったからな。同類なんだろうな。

九月某日

上司に怒られるから、という理由でいろいろと仕事が進めづらいつというのはとても虚しい。

九月某日

昼は31度で朝方は20度みたいな日が続き、ぼんやりす

る。仕事中に渡る球磨川の青緑がとても綺麗。河原でぼんやり過ごしたいが、行動にはうつしていない。

空を流れる夏の嵐に

座り込んでる俺とお前の

距離を測る

針を伸ばした獣みたいに

朝が静かに溢れ出す様に

距離を測る

雲を飛び越え海を飲み干す

昔話がたどる景色の

距離を測る

(ケバブジョンソン 「距離」 作詞…杉浦真寛)

美を漁(すなど)りし人

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

須永朝彦氏が亡くなった。

歌人、小説家、評論家、劇作家、アンソロジスト、歌舞伎・江戸文学・泉鏡花の専門家。様々な顔を持った人だった。

九月に、著作が文庫化されると聞いて、てっきり生活救済が目的であろうと考えていた。長野に隠遁してから、体調が優れず、筆が捗らないという話がここ数年来続いていた。そこへ、「ユリイカ」が増刊で総特集号を出すという話であったから只事ではない。

ネットを検索して、漸く国書刊行会のサイトで顛末を知る。五月のことというから、四箇月遅れである。新聞もTVも報道はなかった。マイナー・ポエットの孤独死など、ニュース・バリューに乏しいのだから。

氏の作品との出会いは半世紀も前になる。

三五の夏であったと記憶する。終刊間際の「幻想と怪奇」誌の広告で『就眠儀式』の書名を見つけたのが、始まりであった。安くはない本だったが客注を出した。届いた本は、箱入りのカッチリした造本で、何と見返しにサインが入っていた。この作者は、何千部という本の全てにサインを入れるのだろうか、と驚いた。本文は、正字旧仮名だったが、読み辛かった、という記憶はない。文語聖書を読み慣れていたし、三島由紀夫にも手を出し始めていたためだろう。掌編小説というべき短いものばかりであったが、作風は好みに合った。

その後、新刊が出る度に追いかけた。値の張るものばかりだったので、全てを購入できた訳ではなかったが、とまれ、作品を通して人となりを知るのが専らであった。

状況が変わったのは、拙著が氏の目に留まって、一度遊びに来ませんか、とお誘いを頂いた時からである。

氏は、若手の作家や所縁の編集者たちと月一回の例会を催していた。参加者は各人各様の呼び方をしていたが、氏は〈倶楽部トランシルヴァニア〉という呼称が気に入っていたようだった。

一九九一年の秋か冬のことと記憶するが、築地明石町のマンションにお邪魔した。築地本願寺を横目に見て、聖路加国際病院にほど近い場所である。

当日の参加者は、英文学者のN氏、ミステリ作家のH氏、雑誌編集者のE氏、出版社のI氏、Y氏であった。

どんな話をしたのか、最早、霧の彼方であるが、ひとつだけ、当時、N氏が翻訳・刊行中であつたド・クインシーがしきりと話題に上つていたことを覚えていゝる。翌日は、上野の美術館にお伴した。

思えば、この頃が、氏にとつて心身・仕事共に絶好調といふ、最も充実した時期ではなかつたか。

その後、著書の恵贈や、手紙のやり取りがあり、時に古い映画のダビングテープを送つたり、蔵書の一部を頂戴したりと交流が続き、東日本大震災と豪雨災害で家財やマンションが被災したのを機に千曲市に引き籠られてからも、年賀状やメールの交換を継続していたのだが、こゝ一、二年は途絶えていた。ブログで体調が芳しくないことを承知していたので、賀状で健康をお祈りするのみであつた。

刊行された「ユリイカ 総特集・須永朝彦」を読んで、

興味深かつたのは、氏への評価が、性別、年齢別ではつきり異なることであつた。

女性は総じて甘く、「崇拜」までは行かずとも、仰ぎ見るの体であるのに対し、男性の若年層（と言っても上は六十代だが）は尊敬しつつ仕事内容を冷静に評価、氏のデビュー前後を知る高齢の人々は聊か辛辣である。

原因は、やはり塚本邦雄との確執であろう。一時は肝胆相照らし、兄弟の約を交わし、秘書の仕事まで引き受けていたが、一度こじれると際限がない。永井荷風と平井呈一の關係に酷似している。

師匠には、盛り立ててやつた、という思いがあり、弟子にしてみれば、世に出してくれた恩こそあれ、それから先は己の実力と割り切っていたかも知れぬ。戦中派と戦後派の処世の有り様と言つてしまえば、それまでか。

死人に口なしとはいへ、一箇所だけ、師匠を揶揄した部分があつた。編集者がわざと加えたと思えないが、泉下の人は莞爾としていゝることだろう。

鳥取あれこれ その六十二

内田 克彦

(地域研究者)

漂流民の利七は、「カメラが撮らえた日本人初の被写体」であり、二〇〇二年刊の『別冊歴史読本 幕末・明治・大正古写真帖』に載っていると、知人から聞いたので、県立図書館の蔵書で確認すると、確かにそのように紹介されていた。さらに調べると、二〇一九年刊の『秘蔵古写真 幕末』（監修 日本カメラ博物館）では、扉写真に使われており、「漂流民」の項で再度掲げられ、その下に次のように書かれていた。

日本人が写された最古の写真「利七像」

撮影者…ハーベイ・R・マークス

撮影地…アメリカ サンフランシスコ

撮影年…1851年

画像…ダグレオタイプ

ところが、その後、県立博物館の二〇一〇年度企画展『海と生きる』の図録を改めて見たところ、日本カメラ博物館写真提供の利七以外に、亀蔵・仙太郎が横浜美術館から、

岩吉・清太郎が川崎市民ミュージアムから写真提供を受けて、載っていた。

さらに調べるため、播磨町郷土資料館の二〇一四年度の「ジョセフ・ヒコ新聞発行150周年記念特別展」『ヒコの生涯と新聞史』の図録を取り寄せてみると、上記の五人に加えて、「個人蔵」とする彦蔵（彦太郎）の写真も載せられていた。つまり、同時に写されたであろう人物は計六人であり、利七はその中の一人ということになる。

なお、図録の「引用・参考文献」欄に載る「ダグレオタイプに写された日本人」（『川崎市民ミュージアム紀要 第11集』（一九九九年刊））は必読である。

また、この図録には、「JAN・22・1853」付の『イラストレイテッド・ニュース』の、三段に分けて描かれている（当時は写真をそのまま印刷する技術がなく、写真スケッチしている）栄力丸乗組員一七名（亀蔵は服装を変えて二段目と三段目に二回載っている）の絵姿と紹介記事の写しが頁全面に載せられており、次頁にはその記事の全文が和訳されていた。

因みに、一九九六年七月四日付けの『朝日新聞』で、「われらが初の日本人被写体!?!」「「ペリー後」の通説

3年さかのぼる 米船に救助されパチリ」の見出しで、いずれも一九八〇年代に買い入れた、パリで所有されていた川崎市民ミュージアムの二枚とニューヨークで所有されていた横浜美術館の二枚の、四枚が取り上げられている。

ここで通説とは、一九八三年二月一三日付けの同じ『朝日新聞』に「拙者こそ最古の写真」の見出しで掲載されていた、一九五四（嘉永七）年一月から三月にかけて、E・ブラウン・ジュニアが横浜で写した、ハワイ・ホノルルのピシヨップ博物館が保管する、通訳の名村五人郎を写した一枚のことだろう。

さて、長瀬村の利七のことである。利七からの聞書は奥多昌忠によるいわゆる奥多本（安政二年成立）と、堀敦斎・正墻適處によるいわゆる尚徳館本（安政三年成立）が広く知られており、吉村昭著『アメリカ彦蔵』でもこれら二つが紹介されている。利七が関係する古文書を翻刻し続けているのが、茂住（もずみ）實男（じつお）である。

まず、茂住による奥多本の翻刻文（『拓殖大学論集』一九八七年刊）の底本は、県立図書館倉吉分館（現倉吉市立図書館）蔵の『長瀬村利七漂流談』（前後二巻一冊）である。前巻は栄力丸の経過及び乗組員の状況を載せ、後巻は

「漂流雑話」としている。但し、後巻末尾に、「右の外何ぐれと聞つれど、昌忠が忘れ果たるも多く、利七が話し残せるもあらん。〔略〕さて猥りに世俗語るべからざる事ハ、別に秘録し畢ぬ。」とあり、「秘録」の部分の欠いている。

ところが、『日本庶民生活史料集成 第五巻 漂流』（一九六八年刊）に収録された、「池田皓氏所蔵の写本（上中下三巻本）を底本とし奥平（奥多は明治以降奥平に改姓）本を参考にし」て翻刻した『長瀬村利七漂流談』は、「秘録」の部分はないものの、茂住翻刻文にはない「巻之中」の部分がある。そこには、ペリー来航に関する興味深い記述があった。

ヘルリ云、日本神國といへども、太平久しく武威おとろへたれば、神威も古へのことくにはあるべからず。何にまれ一應對して見んとするに、兼ては軍艦十三艘に四千人乗組て渡る積りなりつるに、かの船頭共揃はされとも、いつ揃ふへきにもあらざれば、思ひ放して来りし處、浦賀の應對、聞しにも似ぬ御寛宥の事にて、ヘルリの高名世界に響きしことなり。

（以下、続く）

二〇二・九・一六

こまぶき。

秦卓 梅林

(楽人)

最近、張本勲や森元首相といった（80代以上）昭和ノオヤジ達の荒っぽく些か軽率な発言が度々物議を醸した。何処か居酒屋の片隅、酒でも呑み乍ら紅ひ顔して持論展開しておけばよかったのだらふが、TVで喝！みたひな公の場で： 袋叩き。發言の是非や内容はともかく「此の時代になって古臭ひ昭和感覺」が煩ひ由

I

パソコンが完備されドローンの翔ぶ、この令和の世は一体それ程、洗練されヒューマニスティックな理想的文明社会になってゐるのだらうか？

「言葉狩」が、まるで中世の魔女狩宜しく蔓延り、思想や言論の自由、個人の権利は統制され、差別の根は変はず唯臭ひモノには蓋をし完全に匿して了ひさへすれ

ば、どんな暴力も偏見もOK、外ツラだけ気にかけておけば内側は解らなひのさ。そんな野蛮、残忍で「個」を尊ばなひ、暴力と戦争の時代こそが戻つて来て居るのでは？

II

理想的コロニーの建設・運営に高ひ志を持ち、夢を掲げ取り組む極めて優秀、高潔な俊英も、或ひは高邁な事業をひたすら推し進める逸材も、例へばオセロに詔ふイヤーゴのやうな前近代的な側近をたつた一人傍らに置けば、或ひはマクベスの如き魔女達の囁きやら愚夫人在れば？ 忽ち其の批評眼を欠き唆されて了ひ迷いを生じる。

周りの真実を訴へる声、無垢の涙、純粹な袴も何もかも聞こえず見えなくなつて了ひ全て踏み躪つていとも簡単に独裁への道を往くのでは無いか？ ファツシヨへ。熱心で真面目な人物こそ！

我が國で凡そ80年前、多くの無辜の血が流され、まさに亡国の歴史を歩んで了つた事実も、まう此の時代に有つては「古臭ひ昭和感覺」：唯々煩ひ訳である。

III

その昭和よりもずっと以前にシエイクスピアアの劇に
克明に描かれた「人間」が、隣国の独裁者以前に、当然
の如く僕らのごくごく身近で邪な妄想や偏見に躍らされ
て居ても、いまどきの良識やマインド、コムピ्यूター
では一向危機感を覚える事も無く全く太刀打ち出来なひ
のでは？

さう思つて薄ら寒さばかり覚へるいまどき、ではある。

2021. 09. 10

『今回の一冊』

W. シエイクスピアア 「マクベス」 ①福田恒存訳新潮文
庫刊②小田島雄志訳白水Uブックス刊③松岡和子訳筑摩
文庫刊

『今回のディスク』

D. ショスタコーヴィッチ 「ムツェンスク郡のマクベス
夫人」 Op.29. (歌劇 4幕6場) (1930～32)

台本 A. プレイス / 作曲者

原作 N. レスコフ

M. ロストロポーヴィッチ指揮アンブロジアンオペラ合

唱団 / ロンドンフィルハーモニック管弦楽団

G. ヴィシネフスカ、D. ペトコフ、N. ゲツダ、W. ク
レン、R. ティアー、B. フィニーリヤ他

1978年、4月ロンドン、アビーロードスタジオ録

音



イラスト 秦阜梅林

働きアリでいるのは疲れてしまっから

「ケアの倫理とエンパワメント」に寄せて

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

長年困っている自分の性格がある。

働きたがる性分である。

働きたがっているのか、やりたいことが多いのか、いつの間にか多忙感にあふれたスケジュールになっていることがある。

いや、スケジュールの問題はたいしたことではない。今やオンラインで話し合ったり、作業したり、移動時間を奪われないだけ、簡単にすむことも多くなっている。

それよりも問題なのは、誰かが「他の人がやってくれらるだろう」「他の人にやってもらえらるとうれしう」と思っていることを率先して私がやってしまうことなのだ。その期待を先回りして、あるいは暗に仄めかされて、動き出してしまう自分の考え方・思考法が嫌いになつてきた。世の中には、「世話好き」とか「ほつとけない性格」とか言わ

れるものだと思ふ。

「やりたいならいいじゃないか」とも思ふのだけれど、一方で自分が誰かに時間を奪われている感覚は残る。その人が私にやつてほしくて、言つてきた事ではないと知つてゐる。それなのに、私は勝手にやつてしまつて、勝手に疲れてしまふ。そうやつて他の人に時間と労力を奪われてゐるよふな感覚を抱く。とてもじゃないけれど、私の被害妄想はひとりよがりで、その人を責めるには値しない。

『ケアの倫理とエンパワメント』（講談社）を読んだ。

コロナ禍によつて、より注目されるよふになつた政治における「ケア」の不在、ケア労働が多くの女性に担われていること、そして、家庭における「ケア」も軽視されてきたことが、新自由主義に対抗する軸として見直されている。この本では、そのよふな「ケア」の考え方を、ヴァージニア・ウルフ、オズカー・ワイルド、三島由紀夫、平野啓一郎などの作品から問い直してゐく。

女性たちのエンパワメントは、当初家庭でのケア労働からの解放という形で始まつた。「ケア」の姿勢は女性に求められていた。他者に共感的であり、思いやりながら世話をする。あるべき母の姿、女性の姿はそのよふに固定化されていた。

一方で、ケア労働が必要不可欠であり、そのような家庭での「ケア」が、人を育て、生活していくのに必要であるならば、私たち自身は、その「ケア」とエンパワメントの両立、ある意味ではその両方の解放を目指さなくてはいけない。「ケア」について唱える論者が持ち込むのは、そのような新たな視点だ。

私自身、この本を読むまで「ケア」のことはずっと軽視してきた。それは、女性の社会進出を応援する社会の期待が影響しているかもしれない。家庭に入ろうとする友人をどこかで下に見ていたが、そういう道を取ることも、受け入れられるべきであろう。大事な人間の営みだから、誰でも「ケア」に関与すべきだし、「ケア」に関わっているだけだと、自らを貶める必要はない。

私自身、「ケア」する側として、働きアリのように動いているのかもしれない。

誰かがやらなくてはいけないことがそこにあるなら、私がやるべきだろうと先回りする。それは一緒に過ごしている仲間に対する「ケア」だ。そして、私の時間は奪われる。他人の「やりたい」のために、自己犠牲してしまっただとすら思う。

さて、今までであれば、「ならば自由になりなさい」「自分の心に従いなさい」となっただろうけれど、それだけでは十分でない。人を教える立場になってしまった今、コミュニティの中で、私のように率先して「ケア」に回ってしまう人自体を、私自身がどうやって「ケア」できるかが、自分のなかで、もどかしさを感じることだ。そういう人達の「大丈夫」という声と、他人が目もくれない間に率先してやってしまったことに対する犠牲を払った感覚。

気づいて「ケア」できる人間だけが、コミュニティのたぬを思つて動く。翻つて他の人は？ なぜ気づかないふりをするのか？ その「ケア」を率先してする人自身がそれを自己犠牲と考えて、苦しくはなっていないのだろうか？ そもそもその「ケア」は当たり前前に皆がやるべき事では？ 大人だろうが、子どもだろうが、どんな場所にでも広がりうる不均衡だ。

働きアリの法則がある。よく働くアリの二割、普通に仕事をするのが六割、働かないものが二割らしい。

気づかないで他人に乗つかれる人間だったらよかった。働く方の働きアリになんかなりたくなかった。

放哉さんとくだもの

あきの素生

(くうねるめがね)



盆ごころからぐずぐずした天気が続いて、いつもよりは涼しい夏だったと思う。が、九月に入ってから、気温が三十度以上になる日が何日かあったりして、夏服を着たまま今に至る。エアコンを付けずに過ごす時間や、果物売り場に並び始めたみかんが、かろうじて季節の移ろいを教えてくれる。

夏から出ているぶどうや梨、ここに栗や柿が加わってくると、秋だなあと実感する。秋はやっぱりくだものの季節だ。

放哉さんは、どんなくだものを食べていたのだろう、と
思い、『決定版尾崎放哉全句集』（春秋社、2002）を繰って
みた。

結論から言うと、少なくとも「蜜柑」を食べていた様子
はうかがえる。

小豆島時代に、

蜜柑の皮をむいて咳いてしまった

蜜柑たべてよい火にあたつて居る

という句がある。小豆島で採れたみかんだろうか。今みたいにハウスみかんということはないし、「よい火にあたつて居る」とあるから、季節はおそらく冬。放哉が小豆島に渡ったのは大正十四年の八月で、これは亡くなる八か月前のことだ。もともと肋膜炎を患っていたが、翌一月には「癒着性肋膜炎から来る肺の衰弱、合併症湿性気管支加答児」と診断されている（*1 Pp.220-221）。身体の不調、経済的な困窮の中で、みかんを口にする時間が、彼の癒しであったならいいなと思う。

同じく小豆島時代には、

西瓜の青さごころとみて庵に入る

投げ出されたやうな西瓜が太つて行く

の二句がある。すいかは野菜では、という疑問はさておいて（*2）、南郷庵の近くにすいか畑があったのだろうか。八月に島にやってきたことを思えば、すいか畑はさぞかし存在感があっただろう。

時代をさかのぼって、須磨寺時代の句にも、くだものを詠んだ作品がいくつか見られる。といっても、現代に生きる私が「くだもの」と聞いて即座に想像するものはあまり取り上げられていない。

事実といふ事話しあつてる柿がころがつてゐる

かたい梨子（なし）をかぢつて議論してゐる

と、後はみかんが出てくる句（後掲）がひとつ。ここに
出てくる「梨子」は、私たちの食べている梨とは違う、や
まなしのようなものだろうか。二句とも何やら揉めている
ような。議論しているのは放哉か、はたまた傍観していた
だけか。なんとなく、穏やかならざる空気が感じられる。
一方で、木の実もくだものと見做せば、放哉と子どもた
ちとの交流を思わせる句がいくつもある。

何かしら児等は山から木の実見つけてくる

栗が落ちる音を児と聞いて居る夜

お盆にのせて椎の実出されふるさと

姉妹（きょうだい）椎の実食べて東京の雑誌よんでる

蜜柑を焼いて喰ふ小供と二人で居る

「お盆にのせて〜」は、ままごとのように、子どもが椎
の実をお盆にのせて放哉に差し出す光景が浮かび、ここに
挙げた。須磨寺では、小僧さんたちを含め、子どもが身近
にいる暮らしをしていたのだろう。（*1 p.159）。

木の実の句はほかにもある。

落葉掃けばころころ木の実

両手をいれものにして木の実をもらふ

「両手を〜」は、小豆島時代に詠まれた「入れ物が無い

両手で受ける」に似ているようで、本当に何も「無い」
のだという凄みを感じさせる後者とは異なり、ほっこり
とした温かさをまもっている。両手に木の実を入れてあげ
ているのは、子どもたちかもしれない。

大正八年に「桃が熟れた香ひの木陰にたてり」という句
があるが、桃を食べているわけではないし、りんごやぶど
うは見つけられなかった。今のようになっているんだけど
手に入る環境ではないものな。銀杏や松の実が出てくる句
もあった。放哉さんの生きた時代の食事情を垣間見て、今
月は終わることにする。

*1 村上護『放哉評伝』春陽堂書店、2002

*2 「慣用的には「木のなり物」と、草本性植物のバナナ
やパイナップルなどのほか、園芸上は蔬菜（そさい）とし
て扱われるメロン、スイカ、イチゴなども含む。」『日本
大百科全書』「果物」の解説（コトバンク
<https://kotobank.jp/word/%E6%9E%9C%E7%89%A9-55456>)



ポケットに猛獣を

ドラマリア

(座敷わらし)



十数年ぶりにゲームをしている。カエル姫が、そなたもプレイして貢ぎ物をどんだん送れと仰せになるので。タイトルはポケモンGO。ぽけもんごー……聞き覚えはあるかなぐらいのおぼろげな記憶。数年前街中で歩きスマホをしている人々が大量にいて、それがそうだったような。九つ離れた弟が携帯ゲーム機で遊んでいたのが、第一作目だったような。またなんで今頃、と思うが、大ヒットしたレリゴーも二年経ってから青いドレスでくるくる舞い踊っていたカエル姫のこと、世間とは少し異なる時間を生きているのだろう。

圧力に負けて始めてみると、ゲーム自体はわたしでもできる難易度だった。ただし果てしない。街中を歩いてポケモンに遭う。ぽーん。ボールを投げて捕まえる。育てる。進化させる。別のポケモンに遭う。……繰り返しの日々。久々にゲームをやってみて、改めて気づく。私にとって、

ゲームはそこに存在する「物語」が重要であるようだ。幻想世界の一員として冒険することに。歴史上の武将となつて戦場を駆けることに。そこにある物語に没入する楽しさがわたしを捕らえるのだ。その点、この作品は街を巡ることが主眼だからか語られないことが多く、よくわからないままに同じことを繰り返すのはなかなかストレスだ。

作業感がつらいなあ、ぽーん。このボールはどういう仕組みなのかなあ、ぽーん。どのくらいやったか虫ポケモンは捕まえたかと追及してくるカエル姫をかわすため、半分心を無にしてノルマをこなしながら、時々ちらりと夢想する。こんな風にボールを投げて、猫を捕まえることができたら。ちいさいボールに閉じ込めて、いつも一緒にいられるなら。

……ちよつと素敵かもしれない。



・編集後記:

ニユースです。なんとあの「陽まるアップルパイ」が秋バ
ージョンになって復活！ 変わらずジュシーで圧倒的リン
ゴ感。…ニユースでした。 ドラメリア (編集長)

コロナ禍、人との交流が途絶えがち。見えているものより
隠れているものへと関心がすすむ。そして書物は期待を裏切
らない。
奈良敏行 (発行人)